# 歴史と偶然

## 歴史は偶然の出会いから形成される

小林　道憲

# 歴史と偶然

## ―歴史は偶然の出会いから形成される―

小林　道憲

歴史は、無数の出来事の相互連関から常に新しいものを創造していく動的系である。そのかぎり、歴史は出来事と出来事の偶然の出会いから形成される非決定的で、予測不可能なものと考えねばならない。歴史の瞬間、瞬間のところで、偶然に翻弄されながら、われわれがどの道を選ぶかによってその後の歴史は大きく変動する。歴史は生きものである。〈生きた歴史〉の新たな見方を提示する歴史哲学的考察。

### 1　偶然とは出会いである

## 偶然からカオスへ

室町幕府の八代将軍・足利義政は、二十歳の時、日野家からその娘・富子を娶ったが、富子には跡継ぎが生まれなかったため、義政は弟の義視を後継者に指名しました。ところが、翌年、たまたま結婚後十年にして富子は男児を出産、そのため、富子は我が息子を将軍に就けようと、幕府の実力者・山名持豊に接近し、それに対して、後継者に指名されていた義視は細川勝元に接近、山名・細川の両雄は次第に対立を深めました。諸国の守護大名も両頭目のいずれかにつき、ついに二十五万以上の軍勢が京都に結集、東西に分かれて激突し、一四六七年、都の大半を焦土と化す十一年におよぶ戦乱が始まりました。応仁の乱として知られるこの戦乱は、足利義政の無能ぶりも手伝って、地方にも波及し、未曾有の大戦争に発展、世は下剋上の風潮に支配され、やがて戦国時代へと突入します。

しかし、考えてみれば、この未曾有の大戦争も、ちょっとした偶然と行き違いから勃発したとも言えます。もしも、

日野富子がたまたま結婚後十年にして男児を出産しなかったなら、また、もしも、義政が弟の義視を後継者に指名しておかなかったなら、山名・細川の対立も深まることもなく、都を灰塵に帰すほどの戦乱も起きなかったかもしれません。

<クレオパトラの鼻>で知られていますように、もしも事件が少しでも違った形をとっていたなら、その後の歴史は大きく違っていただろうというようなことは、わたしたちの歴史には山ほどあります。平清盛が常盤御前の命乞いについついほだされて幼い頼朝・義経を助けたことが災いして、結局平氏そのものを滅ぼしてしまったように、大きな事件も小さな起源をもち、どんなに小さな事件からでも大きな変化が引き起こされます。わたしたちの人生でも、あの時のほんのちょっとした誤算や偶然事がその後の帰趨を決めてしまったというようなことに思い当たることはよくあります。大きな地震も、一つの小さな岩が滑り落ちることから始まるように、偶然に起こった些細な事件でも、歴史の流れを根底から変える力をもっているのです。

一千万人以上の戦死者を出し、全ヨーロッパを震撼させた第一次大戦のような大戦争も、サラエボの小さな偶然から勃発しました。歴史から偶然性を除くことはできません。ある意味で、歴史は恣意的な原因から起きる諸事件の連続だとも言えます。偶然は、誰にも予測できない結果を生み出します。とすると、一つの歴史的事件を説明するのに、主立った原因を選び出していただけでは、その事件を理解することはできないということになります。確かに、決定的な原因を見出すことによって、一つの歴史的事件の過程と結果は合理的に説明されます。しかし、偶発的な原因によっても歴史の大激変が起きることがあることを考えるなら、歴史は、実際のところ、それほど合理的にできているものではないと言わねばなりません。

自然界でも、結果が初期値のわずかな誤差に極めて敏感に反応する不安定性が見られます。ここでは、ちょっとした偶然の攪乱でも指数関数的に増大し、意外な結果を生み出します。極めて小さな原因が大きな結果を生んだとき、わたしたちは、通常、その事件を偶然に起こったと言いま

す。カオスの最初の発見者であったポアンカレも、『科学と方法』の中で、

「吾々の眼にとまらないほどのごく小さい原因が、吾々の認めざるを得ないような重大な結果をひきおこすことがあると、かかるとき吾々はその結果は偶然に起こったという」

と述べています。歴史も、また、瑣末な偶然の出来事から大きな結果が生み出されるカオスなのです。

**予測できない歴史**

確かに、結果を知りうる立場にある観察者から見て、結果を引き起こす極めて小さな原因を確定することができないとき、それを偶然と呼びます。しかし、そればかりでなく、事件の当事者から見ても、到底予期できない原因によって大きな結果が生み出されたときも、その事件は偶然によって起こったと言います。前者は、結果から原因へ遡ったときの偶然であり、後者は、原因から結果へ向かったときの偶然です。

例えば、足利義政にとって、結婚した日野富子に長い間跡

継ぎが生まれなかったということは予期に反することでしたし、たまたま結婚後十年にして男児が生まれたということも予期に反することでした。さらに、それが切っ掛けでとんでもない戦乱が起きたということも、予期に反することでした。

わたしたちは、予期に反することが起きたとき、それを偶然と言います。予期するとは、このような条件のもとではこのようなことが起きるであろうということが必ずまたはかなりの確率をもって予測可能な場合、それを期待することです。ところが、わたしたちの人生や歴史は、常に期待に反した想定外のことが起きる可能性をもっています。生きているということは、偶発的で予期できない事態に遭遇する可能性にさらされているということです。しかも、このような偶発的で予期できない事態によって、その後の経過は大きく変わり、その結果も、多くの場合予測できません。

さらに、予期しなかったことは、自己自身の行動についても起きます。人の行動は、必ずしもよく考慮された上で

行なわれるとは限らず、<ふと>そう思ったために<ついつい>行動してしまったというようなことがあります。また、たとえどんなに思慮深く行なわれた行動であっても、その時たまたま起こった何事かが切っ掛けとなっている場合もあります。偶然は、決断の大きな力にもなるものです。

一般に、わたしたちの歴史では、どんなに詳しく先行条件を検討しても、ある事件がいついかなる形でどのようなしかたで起きるか、その起き方を予測することはできません。個別には偶然の要素が入ってきますから、予測することができないのです。個々別々の事件によって成り立っている歴史は、予測することのできない偶然によって形成されているとも言えます。偶然は、一つの事件を別の方向に発展させていく大きな働きをするのです。

確かに、歴史は偶然の連鎖だとも言えます。現に、二十世紀のドイツの偉大な歴史家マイネッケは、第二次大戦後、過去四十年間にわたるドイツの悲劇を偶然の連鎖に帰しました。ドイツの第一次大戦から第二次大戦に至る不幸は、カイザーが虚栄心に満ちていたこと、無能なヒンデンブル

クがワイマール共和国の大統領に選出されたこと、偏執狂的なヒトラーが登場したことなど、偶然の積み重ねによって起こったと、マイネッケはみます。しかし、これは、必ずしも、マイネッケが祖国ドイツの悲劇に遭遇して意気阻喪したための発言ではなく、一面、歴史の真実を突いた発言だったと言わねばなりません。

自然界でさえ、その系がより複雑な場合には、予測することのできない偶然によって結果は形成されます。例えば、環境の変動の偶然に対して、植物や動物がどのような生き方を選択し、どのような道筋を通って進化していくかは予測することができません。それは、かなりの場合、偶然によっているのです。

### 因果と目的から外れた偶然

確かに、一つの出来事が生起するには、それが起きるべくして起きる十分な理由があり、あらゆる出来事には原因があります。一つの出来事は、無数の原因が交わる交差点に生じるのです。しかし、交差点を構成する因果系列は無

限にあるとともに、交差点そのものも無限に生じますから、交差点での原因の出会いは完全に解明することはできません。また、他の交差点に生じた出来事とどう出会うかも予測することができません。

このように、二つ以上の事象が因果性という必然的関係なしに出会うことを、わたしたちは偶然と呼んでいます。一つの出来事が生じる因果の系列は必ずあるのですが、一つの因果系列と他の因果系列は、必ずしも因果の必然によって結ばれてはいません。二つ以上の因果系列がどこでぶつかるかは、どちらの系列からも予測できないのです。偶然は、この二つ以上の因果系列の出会いによって生じます。そして、歴史的事件は、多くの場合、このような因果系列相互の偶然の出会いから起きるのです。その出会いからどのような新しい出来事が生じるかは、誰にも予測することができません。

例えば、織田信長の桶狭間の戦いでの見事な勝利も、偶然によっています。今川義元が、ほんの三百騎を連れただけで桶狭間の窪地に休息をとっていたところへ、たまたま

猛烈な夕立が降りました。それが幸いし、信長は二千の兵で義元の陣に突入、義元の首を挙げ、奇襲に成功したのです。今川義元が油断をして少数の手勢だけで休息をとっていたのにも、それなりの理由があります。また、その時猛烈な夕立が降ったということにも、それが起きるだけの気象学的な十分な理由があります。さらに、信長が少数の兵を連れて奇襲を決心したのにも理由があり、どれにも必然的な因果系列が存在したでしょう。しかし、以上の三つの因果系列が、桶狭間の窪地でその時その場で出会うということには、何の必然的因果も存在しなかったとみなければなりません。しかし、このような偶然が幸いして、信長は桶狭間の大勝利を獲得し、天下一統への第一歩を踏み出したのです。そして、それが切っ掛けになって、秀吉、家康と、主に尾張や三河出身の武将によって統一事業は引き継がれ、近世日本の新秩序がつくられていきました。としますと、この大きな歴史変動は一つの偶然によって生じたことであり、そこには、必ずしも、そうならねばならない必然性があったわけではないことになります。

歴史は出来事の相互連関からしか自己自身を決定することができませんから、それが取りうる形は偶然性に満ちています。偶然の出来事は、ものごとが進んでいく方向にズレを起こしていきます。そのわずかなズレによって、出来事の出会いのしかたは変わり、事態は大きく変化していきます。原子論を唱えたエピクロスは、原子にはその本来の軌道からわずかにずれる性質、クリナメン（ clinamen:偏り ）があるとし、その偏りによって原子の衝突は可能になり、万物が生成するとしました。歴史も、また、エピクロスの言うクリナメンによって、思いがけない方向に動いていくのです。逆に言えば、偶然性はどのような結果でも生み出す力をもっており、創造性を引き出す力をもっています。歴史がどのような方向に動いていくかは、ほとんど偶然によっているのです。偶然の出来事が人間の運命において演じる役割は大きいと言わねばなりません。

歴史家は、偶然に満ちた過去の歴史的事象から意味のある事実を選び出し、それをつなぎ合わせ、合理的な説明を加えて、歴史記述の中に一つの筋書きをつくります。その

場合、多く用いられるのが因果関係です。特に、歴史家は結果から原因を探求し、それを因果系列にそって整理します。そのことによって、なるほど歴史過程は合理化され、理解可能なものとなります。しかし、それは、多くの場合味気ない<後講釈>にすぎず、その過程を実際に動かしていた偶然の要素は無視されています。因果法則は抽象的なもので、具体的な現実には厳密には適用できないものです。歴史には、その大きな筋道とは無関係に起きる偶然事があり、その偶然事が、歴史を予測不可能な方向に大きく変えていきます。とするなら、偶然に満ちた不確実な歴史的過程から因果律に合ったものだけを選び、それ以外の偶然的事実を無視してしまうことはできないことになります。偶然は、歴史家が求めようとしている原因結果の連鎖を遮断します。因果外偶然というものがある以上、すべてを因果律で説明することはできないのです。

　わたしたちは、また、<こうすればああなる>と因果連関を前提して、結果を予測し、それを目的として、そのための手段を講じて行動に出ます。このとき、たとえ目的手段

の連関の中で行動していても、連関以外の偶然事によって、目的としたこととはまったく違った方向に事態が進んでいってしまうというようなことがしばしばあります。

例をあげますと、青森の三内丸山遺跡の発見のように、県営野球場の建設を目標に整地作業をしていたら、偶然遺跡を発見し、発掘を進めたところ、巨大な縄文遺跡だったというような場合です。この縄文遺跡の発見は、野球場の建設という目的手段の連関からはずれた偶然だと言えます。しかし、この偶然によって、野球場建設は中止、事態は遺跡の発掘と保存の方向に大きく変わり、そのおかげで、日本のそれまでの縄文時代のイメージは大きく変えられました。三内丸山の縄文人の千五百年の営みと現代人の野球場建設とは、別々の因果関係にあります。その両系列間に目的性以外の出会いが生じたとき、わたしたちは、これを偶然の発見と言います。このような出会いには、目的性も計画性もありません。このような目的外偶然によっても、わたしたちの人生や歴史は大きく塗り変えられていくのです。

## 創発としての偶然

歴史においては、多くの出来事が出会うことによって、まったく新しい事件が創発してきます。多くの原因の相互作用から、予測不可能な結果が生み出されるのです。たとえ過去と現在のすべての原因をあげても、その出会いと相互作用から何が生まれるかは分かりません。何が創発してくるかは出会いにより、そこにこそ偶然性が働いています。これを<創発的偶然>と言うとしますと、因果外偶然も目的外偶然も、結局、創発的偶然に帰着します。

歴史は、このような創発的偶然によって動いていきます。例えば、アレクサンドロスやシーザー、ムハンマドやチンギス＝カンなど、統率力と行動力を伴った英雄が突然登場し、人類史を大きく変えていくことがあります。これも、歴史が創発的偶然によって成り立っているということの顕著な事例です。このような英雄の登場の原因はいくらもあげることができるでしょうが、それらは、ほとんど後の歴史家の後付け説明にすぎません。どんなに原因を列挙してみても、それらの相互作用からどのような英雄が生まれる

かは、実のところ誰にも分かってはいないことなのです。歴史を動かす当事者の視点に立つなら、そのような英雄の登場は、予測できない創発的偶然です。このような英雄の登場によって、人類史は一挙に飛躍します。

社会の片隅で行なわれた偶然の発明や発見が巨大な歴史的変革をもたらし、社会を一変させることがあるのも、創発的偶然の一例です。現に、栽培植物の発見や鉄精錬技術の開発なども、もとは、世界の片隅で行なわれた偶然の発明・発見でした。しかし、それらがなかったら、農業革命も古代国家の形成もありえなかったでしょう。コロンブスがアメリカ大陸を発見したのも、目的外偶然によります。しかし、この発見によって、ヨーロッパと新大陸がつながり、西洋近代史の中に新大陸が組み込まれることになりました。これら偶然の発明や発見は、多くの場合、原因結果や目的手段の枠の外にあるものとの出会いによってなされます。そのような因果外偶然や目的外偶然によって、新しい歴史は創発してくるのです。

科学や技術の発明・発見なども、しばしば偶然からなさ

れます。その偶然を見逃さずに科学の発展や技術の開発に供していこうとするのが、セレンディピティといわれる発想です。そこでは、固定観念や常識の規制をできるだけ緩めて、通常のパラダイムからはみ出た発見や発想、ひらめきを大切にしようとします。偶然こそ、新しいものの創発を可能にするからです。

偶然とは、ないことも可能なことであり、その存在が自分自身のうちに十分な根拠をもっていないことです。それに対して、必然とは、必ずこうなる、反対のことになる可能性がないことです。だから、それは、自分自身のうちに存在の十分な理由をもっています。歴史上の出来事は、どんなに瑣末な出来事でも、過去の無数の出来事が働き合って生起してくるのですから、その点では、その出来事は自分自身の内に存在の十分な根拠をもっています。しかし、その出来事と別の出来事の出会いは、必ずしも、自己の内の十分な根拠から引き出すことができません。出会いそのものは偶然です。偶然は必然の反対であり、必然は偶然の反対ですが、反対のものが出会うところに、歴史的生起と

いうものがあります。

このように偶然と必然が重ね合わされた状態から、偶然を手なずけながら、それをできるだけ必然の枠組みに近づけてとらえようとするのが、確率論です。しかし、確率論では、出会いとしての偶然は十分にはつかめません。なるほど、自然科学でも、特に熱力学では、無秩序さを把握するために、分子運動の偶然性を確率論的にとらえようとしています。しかし、確率論では、一つ一つの分子や粒子の偶然的出会いまではとらえることができません。サイコロの目が一から六までのどの目が出るかという確率は、それぞれ六分の一ですが、今ここでサイコロを振ったとき、一から六までのどの目が出るかまでは、確率論では規定することができないのです。しかし、事態は、まさにその目が出るか出ないかによって、その将来は大きく変わっていきます。

歴史においても、右に転ぶか左に転ぶか、確率論では二分の一の確率であっても、どちらに転ぶかによって、その後の歴史の展開は大きく変わっていきます。歴史は、人生

同様、一種の賭けなのです。結局、確率論は、偶然的事象を巨視的に規定するだけで、この賭けにも似た一つ一つの要素の偶然性をつかむことができないのです。自然科学のカオス系でも、偶然に生じる誤差や偶然に起きる変異など、偶然が大きな役割を果たし、その偶然の誤差や変異によって、結果は大きく異なってきます。歴史においても、ちょっとした偶然の差異によって、結果はまるで違ってきます。このような誤差や変異を、確率論によっては把握することができないのです。

また、偶然を、単に情報の不足とか、認識の不足とすることもできません。なるほど、人はよく次のように考えます。すべては因果関係によって決定論的に規定されているのだが、わたしたち人間は有限であるために、因果関係のすべてを知ることができないから、それを偶然というにすぎない、と。しかし、この考えは偶然について十分熟慮しているとは言えません。出会いの偶然性そのものは自由な選択を含み、当事者がどういう決断をし、どういう行動にでるかはいつも謎めいていて、もともと完全には認識でき

ないものだからです。

### 出会いとしての偶然

第一次大戦が、オーストリア皇太子夫妻の乗った車とセルビア民族主義学生との<出会い頭>から出発したように、結局、偶然とは、一つの因果系列と他の因果系列との必然的でない出会いだということになります。その出会いそのものには、理由・帰結の関係も、原因・結果の関係も、目的・手段の関係も存在しません。だから、それは、どの系列からも、予期することもできなければ、あらかじめ計画することもできません。

二つ以上の因果系列が出会って、結節点をつくります。その結節点のところに、偶然性は潜みます。出来事は、この偶然の出会いから生起します。歴史は出来事から成り立ち、その出来事は後に起こるすべての出来事に影響を及ぼします。偶然の出会いから生じる出来事こそ、創造の源です。二つ以上の因果の鎖の偶然の遭遇から、新しい形がその時その場でつくられます。その意味で、それは即興性に

満ちています。人生も、歴史も、一種の即興劇なのです。人生はドラマであると言われるのも、人生が出会いと偶然に満ちているからです。歴史も、また、出会いと偶然に満ちたドラマです。したがって、歴史は、機械論や因果論ではつかむことができません。歴史的偶然は、科学者や歴史家が追究する原因結果の連鎖を断ち切る力をもっています。

自己と他者が<奇しくも遇う>ことによって、ものごとは新しく展開していきます。それは<巡り合わせ>であり、それが幸福な<巡り合わせ>であったときには<仕合わせ>となり、不幸な<巡り合わせ>であったときには<不仕合わせ>となります。だから、出会いとしての偶然は相関的であり、<相手があってのこと>だということになります。機械論は、このような相関的な偶然の出会いをつかむことができません。機械論は、すべてを因果必然的なものとして見ますから、その因果の鎖から外れた偶然の出会いを見落としてしまいます。そればかりでなく、その偶然の出会いから新しいものが創発してくる創発的偶然も把握することができません。歴史的なものは偶然性を含み、その偶然性は、個々

の歴史事象のそれぞれの個性を創造します。その個性を、因果論は記述できないのです。

出会いの空間は、<縁起>の空間です。偶然性は縁によって起きます。英雄の登場にしても、時代を画する発明発見にしても、多分に偶然性を含んでいますが、その偶然性には、それを活かす条件や場所がなければなりません。その置かれる条件や場所との出会いは偶然です。また、条件や場所から見ても、それを活かす主体や個性が登場するかどうかは偶然によります。新しい創造は、このような外的偶然と内的偶然の出会いという二重の偶然から起きてきます。<まぐれ当たり>とか<怪我の功名>とか言われますように、人生や歴史では、意図せずして好結果がでることがあります。これも、条件や場所との偶然の出会いによるのです。ものごとが成就するには、天の時、地の利、人の和がなければならないと言われます。これも、条件や場所との出会いを問題にしています。

生物進化にしても、社会進化にしても、環境の変動は、予想することのできない偶然性を含んでいます。とともに、

その環境の変動に対してどのように対処していくかは、主体それぞれで様々な対処のしかたがあり、対処する主体の方にも偶然性が宿っています。ここでも、主体と環境の二重の偶然の出会いによって、新しい生き方が決まってきます。歴史も、このような二重の偶然から新しい方向を見出していきます。歴史は、偶然の出会いから多様なものを生み出すとともに、世界を刻々と異なるものにし続けます。しかも、それはまえもって計画されたものではなく、別の経過を辿ることも可能であったような偶発的過程です。歴史の経過は、ある意味で、<行き当たりばったり>で決まっていくのです。<奇しき縁>と言われますように、人生や歴史は縁によって起きるものであり、出会いによって生起するものなのです。それは、単なる因果関係ではとらえられません。

　他方、出会いの時間は同時性であり、偶然性はこの同時性から生まれます。偶然とは、同時的な現在における出会い、つまり<出たとこ勝負>なのです。無数の要因が現在において同時に出会い、共働することによって新しい形が生

み出されます。どのような形が生み出されるかは、その時その時の出会いによります。したがって、取りうる形態は様々で、どのような形態をとるかはあらかじめ決定されてはいません。偶然の出会いから、新しい創造も生まれてきます。創作での<ひらめき>のように、現在の瞬間において新しい形が創造されます。人生も、歴史も、そのような現在の瞬間瞬間における偶然の出会いから新しい形を生み出します。人生や歴史が取るに足りない出来事にも左右されるのは、そのことによります。事件と事件が次々に起こり、出来事が推移していく<継起としての時間>は、この現在の瞬間瞬間の出会いから生み出されていきます。

九鬼周造が『偶然性の問題』で言っていますように、偶然性は、この場所、この瞬間における独立なる二元の邂逅として、先端の危うきに立っています。偶然性が生起する時間と空間は、<今・ここ>の時間と空間なのです。

### 運と不運

歴史における偶然の役割は大きいと言わねばなりません。

仮に、ビデオテープのように歴史を巻き戻すことができるとすると、ある時点でほんの少しの違いを加えただけで、歴史はまったく違った結果になります。歴史は、気まぐれに継起するその時その時の条件によって、どんな結果でも引き起こすことができるのです。その意味では、歴史は運・不運によって形成されるとも言えます。人は偶然に助けられ、偶然に災いされます。条件に恵まれ、結果がよければ、幸運であり、条件に恵まれず、結果が悪ければ、不運です。

日本の戦国時代の歴史を考えても、信長・秀吉・家康ラインに天下統一の権力が引き継がれていくことが、最初から決定されていたわけではもちろんありません。それは、ほとんど幸運の連続によって結果したことであり、いろいろな状況が幸いしたためです。その背後には、実に多くの不運な敗北者がいました。その敗北者たち、例えば武田信玄や上杉謙信らは、決してその戦国武将としての能力に劣っていたわけではありません。ただ、二人とも病死しているところをみれば、不運だったにすぎません。この信玄や謙信らの不運が、信長・秀吉・家康らの幸運につながった

だけです。甲の幸運は乙の不運です。歴史的成功を可能にする天の時や地の利や人の和には、多分に偶然が含まれていると言わねばなりません。

生物進化の歴史も、ほとんど偶然の産物です。現に、進化論に新境地を開いたグールドによれば、多細胞動物の歴史はカンブリア紀の進化の大爆発において一挙に開花しましたが、そこで生まれた種の多くがある段階で大量絶滅し、そこから運良く生き残ったものだけがその後分化して、現在のような動物種の秩序ができたのだといいます。カンブリア紀に大量発生した動物種の大半は死に絶え、一部だけが繁栄したことになりますが、そのとき何が生き残るかは、その時その場でたまたま運のいい場所にいたかどうかによって決まります。だから、勝者は、必ずしも、適応上優れていたから勝ち残ったというわけではなく、また、絶滅した敗者も、必ずしも、適応上劣ったデザインを選択したというわけでもありません。絶滅した敗者は、ただ悲運だったにすぎません。この悲運多数死による絶滅とわずかの種の幸運な生き残りというカンブリア紀の気まぐれな進化劇

は、生命進化と偶然について深く考えさせます。生命がどのような方向に進化していくかは最初から決定されているわけではなく、ほとんど偶然によるのです。

このグールドの考えによれば、人類が地球上に登場したのもまったくの進化史の偶然だったということになります。カンブリア紀に登場した脊椎動物の原型をなすナメクジウオに似た<ピカイア>が、大量絶滅をかいくぐってたまたま幸運にも生き残ったために、その後の脊椎動物の進化はあり、ひいては人類の登場もありえたのです。逆に言えば、わたしたち人類の登場には、進化の歴史が別の航路に反れてしまって、生存が抹消されてしまう危機が何百万回もありました。カンブリア紀の大量絶滅のとき、生き残ったメンバーが少しでも違っていて、その組み合わせが少しでもゾレただけで、全く異なった種が登場した可能性もあったのです。

進化の歴史にしても、人間の歴史にしても、不公平と不平等に満ちています。偶然性の配分は、宝くじに似ていて、公平でも平等でもなく、特定のところに偏る傾向をもちま

す。科学的な大発見でも、偶発的な出来事が大きな役割を果たしますから、その機会も、どの科学者にも平等に与えられているわけではありません。ただ、偶然の配分にたまたま与かった科学者、また、その偶然を見逃さなかった科学者に、科学的大発見の栄誉が与えられます。歴史も、人生も、このような幸運な<巡り合わせ>と不運な<巡り合わせ>によって成り立っていると言わねばなりません。

例えば、わが国の歴史でも、元寇で二度とも暴風雨が襲い、わが国が蒙古の支配から免れたことは、まったくの幸運でした。文永の役でも、弘安の役でも、襲来してきた蒙古軍に対して、鎌倉幕府は九州の御家人に命じて防衛に尽くしましたが、その防衛に尽くすことと、二度とも暴風雨が襲来することとには、必然的な因果関係がありません。それは、二度続けて宝くじに当たるのに似て、まったく幸福な偶然だったのだと言わねばなりません。しかし、この幸運によって、その後の日本の歴史は、朝鮮やロシア、それに中国自身のようなタタールの軛を免れたのです。もしも、二度とも大風が吹かなかったなら、わが国の歴史には、

蒙古による支配という無視できない爪痕が残ったでしょう。

一般に、予測することができない外敵との遭遇は、外敵に征服された側にとっては不運です。例えば、南北アメリカ文明にとって、ヨーロッパ人の襲来とその征服は、まったく予想だにしなかったことであり、不幸な偶然でした。メソ・アメリカのアステカも、アンデスのインカも、帝国を形成して順調な発展を見せていましたが、十六世紀前半、突如としてスペイン人がやってきました。しかし、アステカ人もインカ人も鉄器と銃火器をもっていなかった上に、天然痘や破傷風など病原菌に対する免疫をもっていなかったため、急激な人口減に見舞われ、滅亡、この予測しえない不幸な偶然によって、二つの文明は滅んだのだと言われます。アステカやインカにとっては、そもそも、思いがけずも、ヨーロッパ人と<出くわした>ことが不運だったのです。

列車や船の衝突のように、不幸な偶発事故は、二つ以上の予測可能な過程が予測不可能な形で交差し、とんでもない結果を生じることから起きますが、それはいつも理不尽

で、その起きなければならない理由が理解できないことが多いと言わねばなりません。もともと、そこには因果必然性がないからです。魚や鳥にとって、網に掛かることは予測できない災いですが、それがいつわが身の上に臨むかは、魚や鳥には分かりません。人生や歴史にも、これと同じような不幸があまりにも多いと言わねばなりません。そして、人はこの不幸な偶然に耐えることができません。だからこそ、人はこれを逆に決定論によって納得しようとするのです。

独立だと思われる二つの事象が驚くべき一致を見せることがありますが、その一致は両方にとって偶然の符合であり、別々の因果関係の出会いです。その出会いが幸いするとき幸運と言い、災いをもたらすとき不運と言います。歴史は、このような運・不運によって動いていくのです。

## 2　非決定性と不可逆

### 歴史の分岐点

歴史にはいくつもの分岐点があり、それぞれの分岐点で、

どのような道が選択されるかは前々から確定されているわけではありません。分岐点ではあらゆる可能性があり、どの可能性を選ぶかによって、その後の歴史の方向は大きく変わります。現実には一つの可能性しか実現されませんが、歴史の進む方向は、その時その時の分岐点では一つだけではありません。

例えば、わが国の幕末維新の歴史でも、もしも一八六六年に薩長同盟が結ばれなかったなら、もともと犬猿の仲だった薩長は協力して倒幕の方向には向かえなかったでしょう。とするなら、鳥羽伏見の戦いもなかったでしょうから、おそらく、越前藩らが主張していた雄藩連合政権が成立、いわゆる公議政体によって、維新が進められた可能性が大きかったと言えるでしょう。現に、薩長同盟は、実際には決裂寸前でした。もしも仮に下関の悪天候がもう少し続き、坂本龍馬が船で大阪・京都へ到着するのがもう少し遅れていたなら、桂小五郎と西郷隆盛の密約は成立しなかったでしょう。そして、桂小五郎が虚しく長州に帰ったとするなら、高杉晋作らは、第二次長州征伐での幕軍との戦いで、

薩摩から供給されるはずの新型鉄砲も使えず、敗北に終わった可能性もあったのです。

歴史は分岐点の連続です。それぞれの分岐点では、多くの可能性からたった一つの可能性が選ばれて、それがその後の歴史の方向を決していきます。その可能性の選択には、偶然も大きく働いていると言わねばなりません。分岐点で偶然にわずかなズレが生じただけでも、そのズレは次々と拡大し、似ても似つかない結果がもたらされます。歴史のベクトルは、初期の段階でわずかな変更が加えられるだけでも、まったく別の流れをつくります。

歴史における<もしも>は考えてはいけないと言われます。それは、現実に起きた事実を厳粛に受け止めよというような意味でも言われ、その現実は避けて通れなかった必然だったのだという意味でも言われます。しかし、それらは歴史の結果論であり、結果の方から歴史を眺める立場からの発言です。逆に、歴史を動かす当事者の立場に帰り、その時その時の渦中の人物の心中にまで立ち返って考えるなら、歴史はほとんど<一寸先は闇>で動いていきます。だ

から、心の動きも含めて、そのうちの何か一つが現実に起こったのとは違った動きを少しでもしていたなら、違った歴史が展開されていたということは大いにあります。

例えば、もしも、三代将軍家光のときに、江戸幕府が鎖国令を出さなかったなら、その後も、ヨーロッパ諸国との通交や日本人の海外渡航も盛んに行なわれ、近代西洋の文物も早くから怒濤のように入ってきたでしょう。とすると、同じ江戸幕府下にあったとしても、わが国の後期近世のあり方は随分違ったものになり、近代の国民国家への移行も五十年くらいは早まったかもしれません。さらに、日本人の東南アジア・インド洋・太平洋への進出がもっと早くに始まり、欧米との対立ももっと早くに起き、世界史そのものが大きく変わっていたことでしょう。

人生においても、もしあの時ああしていたらきっと別の道を選んでいたのにと、後悔する経験は誰にでもあります。わたしたちの歴史も、そのような後悔の連続だとも言えます。

第二次大戦での日本の選択を例にとるなら、日本の大陸

進出を快く思わなかった欧米列強にわが国がすでに包囲されていたとしても、もしも、そこでの別の生き延び方を画策していたなら、あのような多大な犠牲を被ることなく、わが国は切り抜けていくことができたかもしれません。日米交渉でハル・ノートが突きつけられた段階が、わが国がもはや引き返すことのできない最後のターニングポイントに追い込まれた時点だったと言われます。しかし、もしも、それを最後通牒とは受け取らずに、フランス領インドシナや中国本土からの撤退を決断するか、あるいは、真珠湾攻撃ではなく、石油資源の豊富なスマトラ島の一部の保障占領などに打って出るかをしていたなら、日米戦は起きず、何百万という人命の損失もなかったかもしれません。もはや引き返すことのできないギリギリの窮地に陥っていたとしても、なおかつサバイバルするための何らかの糸口は見つかるものなのです。

歴史の分岐点でいくつもの可能性がある場合、どの可能性が選ばれるかは、かなりの程度偶然に左右されることが多いと言わねばなりません。分岐点での行為の選択のとこ

ろに、しばしば偶然が働くからです。一つの分岐点での偶然は、歴史を別の方向にもっていく力をもちます。しかも、別様でもありえたことこそ、偶然と言われるものなのです。

例えば、関が原の戦いでも、最初、石田三成の率いる西軍は意外と善戦、そのために、徳川方に寝返る約束をしていた小早川軍は動かず、様子を見ていました。その時、不利な陣形を組んでいた家康は、西軍に囲まれて、絶体絶命の窮地に陥っていました。その起死回生策として、東軍は小早川軍の背後から鉄砲を打つ策に出ました。この時、もしも、小早川軍が徳川の東軍を攻める方向に踏み込んでいたなら、西軍は雪崩を打って勝利、東軍は敗北していたかもしれません。小早川軍が我に返って、約束通り東軍に寝返り、西軍攻撃に移ったために、関が原での東軍の勝利はありえたのです。関が原の戦いは、その後の徳川幕藩体制をつくっていく上で大きな分岐点でしたが、そこには、多くの偶然の要素が働いていたのです。もしも、その偶然が徳川方に幸いしなかったなら、支配者はもちろん、幕府の所在地、戦国大名の処置のしかた、領国の配分なども、ま

ったく違っていたでしょう。偶然を跳躍板として、歴史は飛躍するのです。

わたしたちの歴史の形成過程にはいくつもの分岐点があり、その分岐点にはいくつもの選択肢があって、どの方向に進んでいけばよいのか迷っている時があります。そのような迷いの中でどちらか一方を選択することによって、歴史の方向は決まっていきます。二者択一する行為が歴史を限定し、歴史の変動を起こします。行為するということは選択することであり、対称性を破ることです。芯を下にした鉛筆が必ずどちらかに倒れるように、対称性の破れは、新しい構造や形態を形成する上で決定的な役割を果たしています。対称性の破れによって一定方向への自己組織化が起き、もはや歴史的に逆戻りのできないところまで進んでいきます。

この対称性の破れのところに、偶然は働きます。偶然の出会いとか、偶然による情報の察知とか、偶然の事件が決断を促し、歴史を一定方向へと駆動していきます。特に、このような分岐点では、情報が、ある状態を選択する上で

重大な働きをします。情報は可能性の選択肢を減らす契機となりますから、情報が入るか入らないかは、行為の選択にとって大きな意味をもちます。ささやかな情報が入ってくるだけでも、行為の選択は変わり、取られる方向は大きく変わります。しかも、情報が入るか入らないかは、かなりの場合、偶然によっています。

例えば、一九四一年に発覚したゾルゲ事件のその後の処置のしかたをもう少し徹底しておいたなら、日米戦も起きなかったかもしれません。実際の処置は、近衛内閣の総辞職、ゾルゲおよびその協力者であった尾崎秀実（近衛の政治顧問）の逮捕と処刑のみで、近衛の責任も問わず、十分な調査もせず、他の省庁に潜り込んでいた可能性のあるソ連のエージェントの摘発もしませんでした。もしも、この調査を徹底、この情報を、日本国内ばかりでなくアメリカをはじめ全世界に知らせておいたなら、日米をはじめヨーロッパ諸国もスターリン・ソ連の情報工作下にあることがあからさまになり、米英がスターリン・ソ連と手を結ぶということはなかったかもしれません。ゾルゲ事件の発覚そ

のものも、日本政府の中枢部に這わせていた他のエージェントを温存するために、スターリン・ソ連の方から意図的にばらされた情報であった可能性もあります。もしこのことが読めていたなら、第二次大戦の帰趨は大きく変わっていたでしょう。

情報を出す出さない、情報を手に入れる手に入れない、それを正確に読む読まないの別れ道は、行為の選択に大きな影響を及ぼし、歴史の分岐点での対称性の破れを決定づけます。しかし、この情報を出す出さない、得る得ないは、その解釈や判断も含めて、相手があってのことですから、偶然の要素が極めて高いのです。歴史はなお偶然によって動いていくのだと言わねばなりません。

### 歴史は決められていない

歴史のあらゆる時点で偶然が大きな働きをしているとすれば、歴史は非決定的に動いていくことになります。一つの情報を受けるか受けないかでも、歴史は別の道を歩むこともあるのですから、歴史は非決定的です。歴史は、無数

の出来事の相互連関によって形成されていますから、それがどのような形態をとるかは、その時その都度の諸出来事の出会いによります。偶然は、この出会いにおいて働きます。

歴史においては、どの出来事も他のすべての出来事との連関によってのみその方向を決定します。だから、その未来は非決定的であり、それがどのような構造をつくるかは、確定的ではありません。歴史は、無数の出来事の相互作用から自発的に新しいものを創造していく不断の過程です。決定論はこの自発性をつかむことができないため、歴史の次の段階に創発してくる新しいものを予測することができません。歴史には、決定論では把握しきれない飛躍があります。

確かに、十七、八世紀の古典力学的世界観では、完全に決定論的な世界観が提出されました。そして、現在も未来もすでに宇宙が創造された瞬間において決まっていたというような徹底した決定論が展開されました。しかし、このような決定論は、歴史においてはもちろんのこと、自然に

おいても成り立ちません。

十九世紀の歴史哲学でも、この古典力学の影響は大きく、わたしたちが営む歴史も決定論的法則に則っているかのように考えられました。現に、ヘーゲルやマルクスは、まるで歴史にも万有引力があるかのように、歴史を一貫して動かす原動力として<自由の発展>とか<生産力の増大>を設定し、それに基づく決定論的歴史哲学を展開し、歴史を必然によって構成しようとしました。

しかし、実際の歴史は、決定論が主張するように、単純でも理屈に合ったものでもありません。複雑で非合理なものを含む歴史を決定論の網によってつかもうとすると、その網の目からは、いつも歴史の大部分が逃げてしまいます。歴史は、単純化することも合理化することもできません。歴史は、人生がそうであるように、まえもって決定された法則や計画に従って動いていくようなものではありません。だから、未来はもちろん、過去も非決定的なのです。

歴史を貫く普遍の法則はありません。一つの法則で歴史を説明し通そうとすれば、独断になります。歴史は、マル

クスの言うように、奴隷制、封建制、資本制、共産制と進むわけでもなく、トインビーの言うように、発生、成長、挫折、解体、消滅の過程を必ず経るというわけのものでもありません。歴史は、自然の猛威とか、外敵の侵入とか、支配者の権力欲とか、英雄の野望とか、民衆の熱狂とか、法則化できないものによって動いていきます。歴史には、法則に還元できない非合理な複雑性があります。複雑な歴史現象を、単純化し一様化してはなりません。無限に多様で複雑な事象から、性急に単純化された法則を抽出しようとすれば、歴史の複雑性を見落としてしまいます。わたしたちは、複雑で多様な歴史的事象を、複雑で多様なままで理解しなければならないのです。

なるほど、科学の最も大きな特徴は法則定立にあるとされ、極端な場合、すべてのものは初期条件によって決定されると考えられてきました。しかし、今日ではすでに、自然科学的世界も含めて、無限に相互作用している系では、必ずしも一律の法則を定立することはできないと考えられています。科学者のつくる一般法則は仮説にすぎず、考察

する範囲が変わったり、対象に対する見方が変わったりすれば、変更を免れません。その点では、歴史学も同じです。

決定論的法則は、未来に対しては、必ずこうなると断言します。しかし、未来を正確に予測することはできません。未来には、常に予期に反する出来事が起きるからです。わたしたちの歴史では、小さな事件を切っ掛けとして、予想を遙かに越えた巨大な事件が生起します。わたしたちは、一個人においてもそうですが、集団においても、経験を積んで成長していく面をもちます。この未来の創発性や新奇性を、決定論的法則は把握できないのです。

歴史はドラマに似ていると言われますが、歴史はドラマ以上です。ドラマには作者がいますが、歴史には作者がいません。ドラマにはシナリオがありますが、歴史にはシナリオがありません。歴史は、作者のシナリオ通りに動き、結末が作者には分かっているようなドラマではありません。歴史の創作者とも言える歴史の登場人物たち自身にも、未来の結果はどうなるか分かってはいないのです。

もしも、未来が決定論のように予言できるのでしたら、

ニュートン力学のように、未来は、過去の初期条件の中にすべて含まれていなければなりません。しかし、このように、初期条件からすべての時刻における系の状態を予言できるのは、自然のうちでも、複雑性の無視できる範囲内に限られ、それも近似的に成り立つだけです。自然の大部分は予測不可能です。まして、高度な複雑性を抱えたわたしたちの歴史は、もちろん予測不可能です。決定論的法則を打ち立てて未来を予測することは、科学の本来の目的ではなかったのだと言わねばなりません。

歴史法則は、出来事の継起的つながりから普遍的で再現性のある規則性を見出し、これを因果関係によってとらえます。何ものも理由なしには生起しませんから、一つの歴史事象が生起するには、それ以前のあらゆる事象の働きがなければなりません。しかし、だからと言って、これを唯一の因果法則に還元することは不可能です。一つの結果が生まれるには無数の原因があり、因果の連鎖は、事実上時間的にも空間的にも無限に広がります。さらに、一つの歴史事象が生じるには、結果を左右する無数の条件が必要で

す。しかも、その原因や条件の組み合わせは多様ですから、同じ原因が働いていても、その結果は違って現われます。だから、一つの原因を一つの結果に機械論的に結び付けることはできません。歴史は一因一果ではなく、多因多果であり、そのため、同じ原因から別の結果が生まれたり、別の原因から同じ結果が生まれたりします。同じ圧政から暴動が起きる場合もあれば、起きない場合もあり、無謀な策からでも、無策からでも、同じ暴動が起きます。したがって、歴史を単一の原因によって説明することはできません。

歴史を動かす力も単一ではありません。歴史を動かす力には、政治、宗教、文化、経済、技術、環境、その他いろいろ考えられますが、その中から何かある一つの原因、例えば経済とか環境だけを取り出して、これを歴史の唯一の原因とすることはできません。歴史に唯一の原因を固執することは途方もない単純化であり、独断です。単純な歴史法則を定立することは、一般大衆の魂の捕獲には都合がよいのですが、それは宣伝にすぎません。マルク・ブロックの言うように、原因一元論は歴史の説明にとっては障害で

しかありません。一つの歴史事象は他のすべての歴史事象との連関によってのみ決定されますから、歴史を単純な原因に還元することはできないのです。

歴史においては、すべての出来事がすべての出来事と相互に連関していますから、原因結果の関係も単純には決定できません。無数の出来事の相互依存関係からは、単純な因果律では律しきれないものが生じます。単純な因果律は、過去は現在を規定し、現在は未来を規定しているととらえますが、過去や現在の経験を乗り越えて新しい未来を作り続けていく歴史を、このような因果律ではつかめません。

### 偶然の中にこそ自由がある

決定論は、すべての出来事には原因があって、原因に変化がないかぎり、出来事に変化はありえないと考えます。そして、因果の法則つまり事象の必然的継起の法則に基づいて、前にあった出来事を後に起こった出来事の原因に仕立てます。そこには偶然性の入る余地はなく、ものごとはすべて必然的に起きたことになります。つまり、決定論は、

歴史的に起こった事件を起こらざるをえなかったものとして描きます。決定論は偶然性を排除し、歴史を必然の論理で構成しようとするのです。

しかし、歴史には、因果外偶然があり、因果律によっては決定できない偶発性があります。もしあの事件に遭遇しなかったなら、個人の歴史でも、国家の歴史でも、まったく違った方向を歩んでいただろうというようなことはしばしばあります。歴史は、わずかの偶然によって大きく変わっていくのです。不確実性によって、歴史は絶えず変動します。歴史は、多くの人々の無数の行為の選択とその相互連関によって構成されていますから、そこには常に偶然性が介在し、歴史の方向は非決定的になります。因果法則では、この偶発性がつかめません。

決定論は、また、未来に対しては予定論を唱えます。歴史は一個の目的へ向かっての進行過程であり、まえもって決められたコースを歩んでいくと考えます。しかし、歴史には、目的外偶然によって思わぬ方向に進んでいくことがあることを考えれば、歴史の進行方向を一定の目的に向か

って進む過程と考えることはできません。行為が投げ出される場は相互連関性の場ですから、そこには予測することのできない偶然が入り込み、歴史の進む方向を一つだけに限定することはできません。歴史はシナリオのない芝居です。歴史は、予定論のシナリオを狂わす偶然性によって成り立っているのです。

なるほど、ヘーゲルは、英雄や民族が起こす事件の偶然性は、その意図を超えて、結局歴史の計画実現に貢献することになると考え、これを<理性の狡知>と名付けました。しかし、偶然性は歴史を大きく別方向に動かす力をもち、歴史法則を破る力をもちます。このことを考えれば、偶然性を目的論的決定論の中へ手なづけるこのような考えはもはや成り立たないでしょう。歴史に最終目標はないのです。

わたしたちの歴史には、国際情勢の変化とか、他の強国の威圧とか、常に環境の変動がありますが、それに対処するための変革の方向は一つではなく、多様です。どのような方向を選ぶかは、自由に任されています。いくつもの選択肢と多くの可能性があるところに、<選択の自由>があり

ます。しかも、どのような道を選ぶかは、あらかじめ確定されてはいません。未決定という意味でも、わたしたちは自由を確保しています。そして、あらゆる可能性から一つの可能性を選ぶところに、自由があります。歴史を外部から眺めるのではなく、行為者の立場に立って見るなら、わたしたちは未来への自由をもつと言わねばなりません。行為的連関の中にどのような行為が投げ入れられるかによって、歴史の方向は変わっていきます。行為は、必然性と決定性を破る自由をもちます。

わたしたちは常に予測しがたい偶然に面しています。しかし、この予測しがたい偶然に対して自分の生き方を選択するところに、<選択の自由>があります。偶然の中にあるからこそ、自由なのです。必然の中に押し込められていたなら、自由はありません。自由ゆえに飛躍があり、創造があります。創造と自発性にこそ、因果論的決定論からの自由も、目的論的決定論からの自由もあります。

## 歴史は逆戻りできない

歴史の流れは不可逆です。歴史は、人生同様、逆戻りすることも、繰り返すことも、やり直すことも、取り返すこともできないものです。なるほど、「歴史は繰り返す」とよく言われます。日の下に新しきものはなく、かつてあったことは今あり、今あることはこれからもあるであろうとも言われます。確かに、人間の歴史は、何度も同じような愚かなことを繰り返してきたとも言えます。しかし、歴史をつぶさに観察するなら、まったく同じものが二度現われることはありません。ただ、川の流れに生じる渦のように、歴史にはよく似たパターンが生じるだけです。それを、わたしたちは、「歴史は繰り返す」と言っているにすぎません。

歴史がどこまでも創造的である以上、歴史現象は再現されることのない一回きりの現象です。無数の原因や条件から思いがけないものが創発してくることを考えれば、歴史は、二度と同じことを繰り返すことはありません。歴史は、ビデオテープを巻き戻して見るようには、逆戻りすることも、再現することもできないのです。わたしたちの歴史では、たとえ過去に遡って条件を同じくしても、ビデオテー

プのように、完全に同じものが同じしかたで再現されるということはありません。どんな動きも、それ以前に起こったものの繰り返しではありません。すべての動きは、以前に起こったものとは異なっているのです。

同一の状況のもとでは同一の現象が生起するというのが、再現性を基礎に置く自然科学の考えでしたが、この考えは歴史には成り立ちません。それどころか、自然にも成り立ちません。宇宙の進化や生命の進化などは、再現できない一回きりの出来事です。なるほど、物理学や化学は自然の再現可能な部分を扱っていますが、これも、そのように見える部分のみを扱っているにすぎません。自然科学でさえ再現性にこだわることができないとすれば、歴史科学はなおのことです。自然の歴史性が再認識されつつある今日、むしろ、自然科学の方に、一回性と不可逆性を重んじる歴史学の方法を及ぼさねばならないでしょう。

同じゲームが繰り返されることがないように、まったく同じ歴史が繰り返されることはありません。だから、歴史では、実験は不可能です。実験をすれば、実験をしたこと

自身が歴史的動きそのものを乱しますから、歴史においては、実験によって同じものを再現することはできません。それが不可逆ということです。なるほど、自然科学は、自然の繰り返し起きる面に注目し、それを実験によって確かめてきました。しかし、地質学や古生物学、宇宙論や進化論などは、実験もできなければ再現もできない現象を扱っています。まして、これよりもっと高度な複雑性を備えたわたしたちの歴史では、再現を前提にした実験もできなければ、決定論的な法則定立もできません。不可逆性も、非決定性と同じように、歴史を単純な法則に還元する還元主義を阻止するのです。

歴史は不可逆であり、再現不可能です。たとえ仮に、過去の歴史を観察するために、タイムマシーンに乗って、わが国の戦国時代に戻ることができるとしたとしても、わたしたちが戻ったこと自身が一つの歴史的行為になってしまいますから、すでにあったのと同じ戦国時代を繰り返すことはできなくなります。実際、わたしたちが本能寺の変に出くわすことができたとして、その時、信長に「謀叛者が

いるから用心しろ」とでも言ったとしたら、信長は別行動をし、明智光秀に襲われることはなく、本能寺の変は起きなかったでしょう。とすれば、戦国時代の地図は大きく狂ってきます。戦国時代の帰趨が事実あったような過程を辿ったということは、一回きりの不可逆な歴史過程だったのだと言わねばなりません。

自然史や生命史もそうなのですが、歴史というものには、過去にどのような選択をしたかによって現在や未来が規定されるという現象が歴然としてあります。歴史には、履歴というものがあります。その履歴が慣習や制度をつくり、それが反復されれば伝統になります。だから、一つの社会を理解するには、その来歴を研究しなければなりません。現在のわたしたちの生活そのものの中に、過去が来歴として生きているのです。

わたしたちは、遠い過去から経験を積み重ね、それを累積して履歴を形成し、それを未来の新しい経験に引き継いでいきます。経験を積み重ねて成長する過程は不可逆であり、不断に新しいものを産出する過程です。過去の蓄積は、

未来に向けて新しいものを創造するために必要なことです。過去から現在へ、現在から未来へと、歴史は不可逆に流れます。

カオス系にも、経路依存性といわれる履歴現象が見られます。カオス系も歴史をもっているのです。ここでは、初期段階ではどのような方向にでも行きうる可能性がありますが、ある一定の方向が決まるとその可能性は減っていき、後戻りができなくなります。いわば履歴が形成されるのです。カオス系には初期条件への強い依存性があり、ある過程の初期条件の小さな選択が、結果として大きな違いを生みます。この現象を結果の方から見れば、経路依存性となり、履歴現象となるのです。

例をあげますと、ブライアン・アーサーの言うように、今日の自動車社会の元をただせば、内燃機関と蒸気機関が競合していた十九世紀末の初期段階に戻らねばなりません。そこでは、自動車を内燃機関で作るか蒸気機関で作るかの二つの方向がありました。しかし、たまたま馬抜き競争でガソリン車が勝ったこと、そのころ蒸気機関用の水が不足

していたことのために、内燃機関の方により多くの技術改良が施され、ついに蒸気機関による自動車は絶滅。内燃機関による自動車つまりガソリン車が二十世紀を支配することになりました。このことによって二十世紀の歴史が大きく変わったことは、周知の事実です。もしも、このことがなかったなら、第一次大戦も第二次大戦もあのような形では起きなかったでしょう。第一次大戦も第二次大戦も、列強はこぞって石油資源を求めて世界進出し、衝突を起こしたからです。二十世紀の歴史は、十九世紀末の初期条件に敏感に反応し、内燃機関の方向を偶然選んだという経路に深く依存しています。一旦一つの方向を選択した以上、その来歴は消しがたく、不可逆です。

初期段階での選択によって、後戻りのできない長期的帰結がもたらされ、しかも、その選択のところに偶然が働いているとすれば、偶然と不可逆は深く関係していると言わねばなりません。もしも、過去に別の選択をしていたなら、歴史の悲劇はなかったというようなことは大いにありうるのですから、ある一つの選択をしたということは、偶然に

しろ取り返しのつかないことであり、それは不可逆な歴史を形成します。歴史は選択と選択の連続であり、偶然と偶然の累積です。その偶然が、歴史に消し去ることのできない影響を残します。偶然こそ、歴史的不可逆性と一回性を引き起こします。歴史的事実とは、過去において作用した無数の出来事の複雑な絡み合いと偶然の競合の結果であり、それ自身は後戻りもやり直しもできないものなのです。

生きられる歴史的時間は、前後が継起する時間であり、もしも前後の順序を入れ換えれば、それだけで別のものが出来てしまうような時間です。偶然は、この時間の前後を狂わします。わたしたちは、この前後継起する時間の中で、経験と体験を積み重ねていきます。だから、歴史的時間の方向は逆向きにすることも、過去・現在・未来を互いに交換することもできません。時間の矢は逆行しません。壊れた壺は元に戻らないし、わたしたちは若返ることもできません。現在の中に過去を保存し未来を孕みながら、不可逆な歴史は一方向に変化していきます。世界そのものが、不可逆な時間の中で演じられる劇なのです。

## 偶然によって成り立つ歴史

歴史は、法則から外れた例外的偶然事や違った系列の偶然の出会い、別様でもありえた偶然の選択などによって、掻き乱されていきます。しかし、それこそ、歴史の生成変化と創造的進化を引き起こす原動力です。偶然は歴史の生命です。歴史は偶然によって一変します。もともと存在そのものが偶然です。出来事が生起し、今このように在ることそのことが偶然です。歴史は、そのような偶然によって貫かれています。

このことに思い当たるとき、わたしたちは、戦慄にも似た驚異の感情を抱きます。そして、自分自身がそのような歴史の偶然に投げ出されているということを自覚するとき、この過酷な偶然を<運命>として受け取ります。偶然に見知らぬところから襲ってきたこと、偶然に翻弄されながらみずから選択し招いたことなどを、運命として受け取ります。受け取らざるをえません。予測不可能も、非決定も、不可逆も、過酷な偶然です。過酷であるから悩むのです。歴史

の神は、まるで、気まぐれなゲームをしている子供のようです。わたしたちは、この歴史の気まぐれに玩ばれながら、みずからの運命を背負います。歴史にとって、偶然は必然より根源的であり、運命は偶然により近いのです。しかし、だからこそ、わたしたちには、運命を背負いながら、新しい創造に向かう自由があります。

もともと、この宇宙そのものが無ではなく有の方へ傾いたということ、そのことが偶然です。この偶然そのものは、もはや他の何ものにも根拠をもっていませんから、無いことも可能な偶然です。それは、なぜそのようにあるのかと問うことを許されない偶然です。世界はこの偶然から始まります。そして、歴史の全体を貫いているのも、この偶然です。単に歴史の始まりが偶然であるだけでなく、歴史の瞬間瞬間が偶然です。歴史の非決定性と予測不可能性、不可逆性と一回性は、この歴史を貫く偶然性に起源をもっています。偶然が歴史を動かし、世界を動かします。偶然こそ、永遠の生成変化を生み出します。有が無になり無が有になる接点に働いているのが偶然だとすれば、それは生成

を呼び起こします。世界そのものが歴史的なのです。

（出典 『小林道憲〈生命の哲学〉コレクション』3 ミネルヴァ書房 2016 京都　所収『歴史哲学への招待』第二章）